

# 時事新報

第二千四百八十一號  
明治廿二年十一月廿二日  
舊曆己丑十月三十日

參河の有志者中間々之を實行せんとて既に其請願書に  
調印したるものさへありしが東參の有志者は尙ほ念の  
爲め分縣の利害を取調べたる後こそものと覺悟なる

立<sup>リ</sup>て 同<sup>ド</sup>

東叢俱樂部間に其事を托せしかば同俱樂部に於ては本  
月四日臨時総會を開き討論の末全會一致を以て分縣の  
不可なるふとに決定せしが又もや去る十二日東叢五郡  
有應者の大會を開き會するもの七十八名に達し遂に非

○ 療 や る め に 係 る や る

○佐野の政談演説會 柄木縣下佐野町の有志者は東京より船田三郎、四田銳吉の二氏を聘し去る十七日同地に於て講演會を開いた。この演説會は佐野の有志者によるものであるが、その運営は佐野の有志者によるものである。

○泉殿  
は京大相

議座に於て政談演説會を開き、細田氏は初めに彼の條約改正論を演じ、次々中止と延期とは同一にあらずと云へるを演説したり、場内頗る静かにして無事に演説を終り夫れより田嶋樓に懇親會を催はせしに會するもの百名に達し、席上、細田、田中兩氏の演説あり客をくわんと盡して歸

○○○海耕八有  
木德

○名古屋に於ける各新聞社員の懇親會 愛知縣名古屋は從來麻雀の多き處よて事あるの日は其競争中々劇しく行はれまことにとゞれトモアシキ

女行間

有とれ時をしては居外者の聞く忍び見る眼へあきよあらす斯る次第あれば同地の各新聞なども其紙上に於て相互又論争する所は往々皮肉に立ち入り間々公平なる讀者の感情を損ふふともありどあり勿論紙上の論争は何種激しきも各新聞社員が私交上に咸毫も影響

伊勢國  
へ府高  
額に

を及ぼすべきものならぬと度重あれば自然確執の風を  
起すは人情の免れがたき所ろにして此の弊を避けんが  
爲めよや今度名古屋の金城、扶桑、新愛知、愛知新報の  
四新聞社員が相談の上去る十六日を以て一堂の下に會  
〔是れ見事の二重〕  
〔是れ見事の二重〕

少しおは大概  
り之ね

○栃木県政談演説會の中止解散 去る十七日栃木町旭座に於て開きたる自由政談演説會の折高橋安爾氏は政治界の因果と云へるを演説中脱綱なる手足を以て重荷と同地よりの通信

要するに  
類は少

を據はんとするは到底出來得べき限りよあらず然るを  
者し強て之をなすんとすれば臣が手足も折れ果るよあ  
らずやと述べるや<sup>ゆん</sup>藍の警部より中止を命ぜられたる  
と以て曾主は直<sup>ただ</sup>解散する旨を聽衆に告げ夫より縣社

比 賀 治、柏

○天厨の美味奇観を語す 去る十九日は前號にも記載  
せし如く宮中に於ては觀菊の御宴を開かるべきの趣旨

日比  
し何卒  
草擬社  
調新聞

悪く兩天みて誠の御延引となりしかば兼て用意の御料  
理種々不用となりたるより畠田會の育児院へ分與すべ  
事となり五辻大膳大夫より畠田會へ御使を以て下し  
鳴ぱりしかば未嘗有の賜よ院児は何れも天厨の美味に  
喜び思ひ入るに至る。此實に之に比べ

文等の  
分散型

○芝蘭園同會 同區に於ての公民諮詢同會員は來月六日  
を以て本年の納會を閉く由なるが同會員は伊藤、松方、  
坂藤の三伯を始め總數二百七八十名なりと云ふ  
○秋田魁新報と北海  
秋田魁 新報の記者たりし西河

身等の  
弟を賣  
唐へ送

通徵氏は今回都合により同社を辞したるに付其代りとして仙臺よ於て著世俱樂部及び輝正俱樂部等の組織にて始盛力せし佐藤源治氏同社に入り又北海道圖書館よ於て預發する北海は紙面の改良をなさんとて是迄新潟日々新聞の記者たりし佐藤精一氏を聘すると云なりしと遊技娛樂部 今度横濱の謂ゆる商人派諸氏の計畫又

の文章  
の発行  
なる語  
上の私  
の相撲

一 行 ニ 付 十二 銀 十一 銀 十 銀五厘

兩年以後國會開設して責任内閣の制、定まるに至らば  
内閣員は開會の輿論に隨て進退する覺悟なれる可らず  
すれども開會後の政府とても單なる法律制度のみに依頼す  
可らず其機關の機動して注文通りの運動を爲すまでに  
は多少の歲月を要し其間には自ら從前の行持りもある  
とされば開會早々内閣の更迭（今回の如き變則の更迭  
は兎も角も）を見るなどは勿論六ヶしき事ならんれども既に程度の定まる以上は漸次に其習慣を養成する  
ふと大切にして其地位に在る者は平生より事に随んで直ちに決断するの覺悟肝要ある可し即ち是れ政治家の職業にして今後我國の政治機關に圓滑の運動を見るところらざるとは在朝政治家の德義如何に在て存するものと云はざるを得ず左れば責任内閣の貞習慣を作るは猶當局者覺悟に在るものとして抜質的の有様を顧みて此様の果して區分あるや否やを察するに今の當局者は多年の経験に富み事に慣れたる人々なれば躊躇じめ今後之事を慮りて夫れゝの覺悟はあるふとならぬれども自ら省みて事の始末を考ふれば政府全體の事情は極々入込みて難解へ覺悟は定まりても實行の一駆又至りて或は當惑するふともある可しと思はる、其次第を述べんに政府の事は都て當局者の意に任す可きに駁たれども内部に入りて其實際を見れば決して然らず況乎今之の政府の官吏中より其地位、當局者より第二流に居る者あり第三第四流に至るまで各々所屬を分ち朝互に結ぶる姿を成して其勢力は隱然、部内より蟠伏容易に漏かず可らず故を以て地位の高きものにても當局者間の方に乏しき者は往々之が爲めに要せられて殺を圖かすふとなきにあらずと云ふ左れば他年國會開設の後より政府の政策、議場の多數を制する能はず止ひに得ずして其々實効的の實を行ひ顧然内閣を去らんとするの場合に區分當局者の覺悟は既に定まるも當局の内閣を主導として其一派の人々が總ても之を御心を定するの事無もあらずとは如何すべきや當局者命令は既も居りに事體の不協と致すれば第一の發明の如き難くして遂に今日の次第に立至りしと云

○度應義塾の正科別科・今度度應義塾大學部生徒の真集は就き來年一月中入學志願者の試験を執行する由なるが度應義塾に入りて同塾の正科を卒りたる者は此試験と要せずして入學する事を得、又問題の副科を卒したるものは數事英語の二科だけ試験を受ける定めあると云ふ

○會計検査院にては第三部の事務室を増築する等に於て其工事は日本土木會社が請負ひ一兩日前より工事に着手せりと

○官金移轉 三條總理大臣は麻布の邸より出勤し居れども來る二十六日永田町の官邸へ移轉するといふ

○赤分縣の建議 參州分縣の說は最初開拓に起り東西